

## 筑波技術大学保健科学部附属東西医学統合医療センター 2011 年度 鍼灸部門 外来報告

筑波技術大学 保健科学部附属 東西医学統合医療センター<sup>1)</sup>

筑波技術大学 保健科学部 保健学科 理学療法学専攻<sup>2)</sup>

近藤 宏<sup>1)</sup> 櫻庭 陽<sup>1)</sup> 萩野谷泰朗<sup>1)</sup> 鈴木かのこ<sup>1)</sup> 佐久間亨<sup>1)</sup> 平山 暁<sup>1)</sup> 木下裕光<sup>1,2)</sup>

**要旨：**東西医学統合医療センター鍼灸部門の 2011 年度における外来患者統計を報告する。診療日数は 240 日で、延べ来診患者総数は、8,597 人であった。内訳は、新患が 415 人、再診が 8,182 人であった。男女比は男性が 38.0%、女性が 62.0%であった。年代別では、60 歳代が最も多かった。主訴で最も多かったものは、腰痛 132 件で、次いで、肩こり 61 件、腰下肢痛 38 件と続いた。インシデント・アクシデントに関する報告は、48 件あった。分類別では、「鍼の抜き忘れ」(9 件) が最も多く、次いで「一過性の気分不良」(8 件) であった。

**キーワード：**統合医療、鍼灸、患者動向、統計、インシデント

### 1. はじめに

大学附属の診療所として 1992 年に開設し、20 年が経過した。2005 度秋から、四年制の筑波技術大学保健科学部附属のセンターとして臨床活動を継続している。

東西医学統合医療センター（以下センター）所属の常勤職員は、11 人で、専任教員 4 人（医師 1 人、鍼灸師 2 人、理学療法士 1 人）、技術スタッフ 5 人（看護部 2 人、臨床検査部、薬剤部、放射線部各 1 人）、事務 2 人である。その他、非常勤職員が在籍している。

センターは診療部門と施術部門（以下、鍼灸部門）に分かれている。診療部門は、これまで漢方内科、内科、小児科、神経内科、腎臓内科、精神科、整形外科、放射線科が開設されていたが、2011 年度よりリハビリテーション科と循環器内科を新たに開設した。診療はセンター所属の教員および鍼灸専攻、理学療法専攻の教員が医師として診療にあたっている。またリハビリテーション科ではセンター所属の理学療法士 1 人と共に理学療法学専攻の教員 6 人が曜日別で 3～4 人体制で外来臨床に当たっている。一方、鍼灸施術部門は、センター所属の教員 2 人と共に鍼灸学専攻の教員 9 人が曜日別で 2～4 人体制で外来臨床にあたっている。

当センターは、鍼灸学専攻学生の臨床実習の場としての機能をはじめ、本学における医科学の教育研究に係る診療の場として機能するとともに、西洋医学と東洋医学を統合した診療及び施術を通して、地域医療の向上に寄与することを目的としている。また、日本東洋医学会の専門医

のための研修施設であり、鍼灸師の卒後臨床研修も行い、有資格者の卒後研修の場としても機能している。

鍼灸の研修制度は 1993 年から発足している [1]。2011 年度は 6 人の研修生を受け入れ、2 年目以降の研修生をあわせると 16 人（2011 年 4 月時点）が在籍している。研修生は鍼灸師養成学校で資格を取得した後の卒後教育として、指導教員のもとで鍼灸臨床に必要な刺鍼技術や問診法、徒手検査の技術、鍼灸施術の安全性、また、鍼灸外来の環境維持業務を通じて治療室運用の実務までを学んでいる。

### 2. 外来実績

2011 年度（2011 年 4 月 1 日～2012 年 3 月 31 日）の本センターの年間診療日数は 239 日であった。総患者数は、14,823 人で、新規患者（以下、新患）764 人、再診 14,059 人であった。また、医師診療数は 8,044 人、鍼灸施術総数は 8,597 人であった。施術患者率（鍼灸施術総数 / 総患者数）は 58% であった。

なお、リハビリテーション科の総リハビリ患者数は 2004 人で、その内新患は 263 人であった。

### 3. 施術部門（鍼灸部門）の外来実績

2011 年度の鍼灸施術外来実績について報告する。2011 年度の延べ来診患者総数は、8,597 人であった。内訳は、新患 415 人、再診 8,182 人であった。年間施術日数は 240 日であった。日平均施術数は 35.8 人であった。

### 3.1 再診の患者

月平均の再診患者数は  $681.8 \pm 33.3$  人であった。なお、診療日数の月平均は  $20.0 \pm 1.1$  日であった。

月別の再診患者数（図1）は3月（729人）が最も多く、次いで11月（725人）、6月（706人）であり、最少は4月（631人）だった。外来1日当たりの平均再診患者数（月患者総数 / 月開設日数）でみると、8月（37.2人）が最も多く、次いで11月（36.3人）、1月（34.8人）で、最少は2月（31.2人）だった。平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、その影響もあり4～5月では患者の減少がみられたが、6月以後、徐々に前年度に近い来院数を推移した。

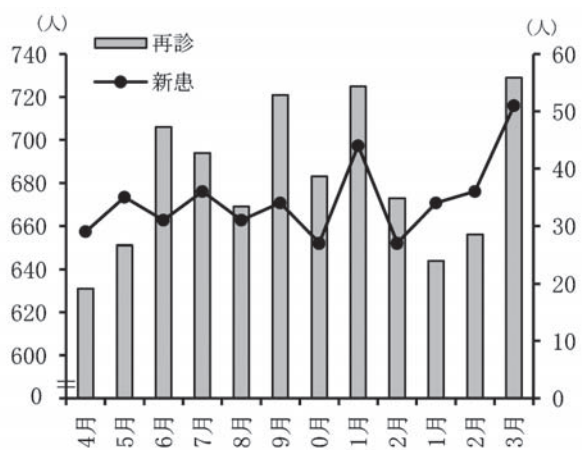


図1 月別患者数（新患および再診）

### 3.2 新規の患者

新患は415人だった。月平均の新患数は、 $34.6 \pm 7.0$  人で、月別では3月（51人）が最も多く、次いで11月（44人）と続いた。最少は10月と12月（各27人）だった（図1）。

また、外来1日当たりの平均新患数（月総新患数 / 月開設日数）でみても、3月（2.4人）が最も多く、次いで11月（2.2人）と続いた。なお、最少は12月（1.3人）であった。

性別は女性258人（62.2%）、男性157人（37.8%）であった（図2）。

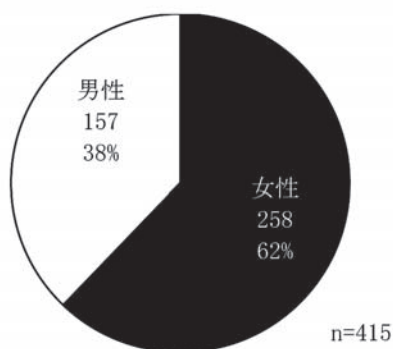


図2 新患の性別内訳

年代別では60歳代（97人、23.4%）が最も多く、次いで30歳代、40歳代、50歳代（各67人、16.1%）であった（図3）。居住別にみると、つくば市内47.7%、つくば市外の茨城県内45.5%、茨城県外の関東6.0%、関東以外0.7%であった。本センターの設置目的の一つでもある地域医療の向上に寄与しているものと考ええる。

紹介状の有無については、有り15件（3.6%）、無し400件（96.4%）であった。紹介元の内訳は、診療所・病院11件（73.3%）、助産院3件（20.0%）、鍼灸院1件（6.7%）であった。

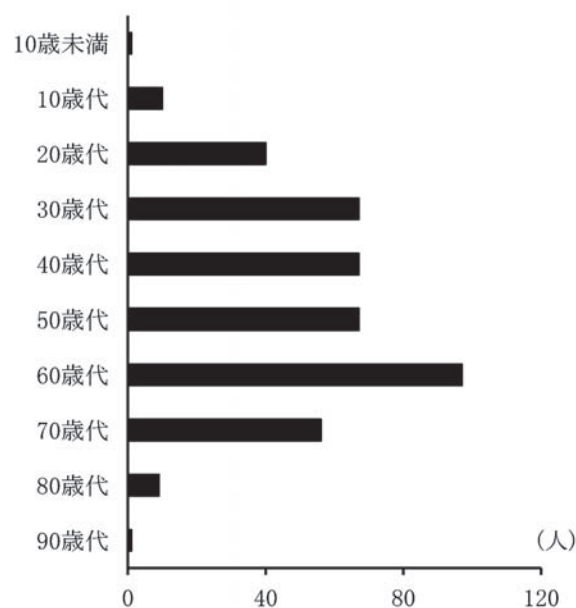


図3 新患の年代内訳

愁訴について、1人あたりの愁訴数は1.7件であり、内容は腰痛（132件）、肩こり（61件）が多かった（表1）。この2症状は、平成19年国民生活基礎調査[2]での有訴者率の上位2症状と同様の結果であった。

表1 新患の愁訴

愁訴	件数	愁訴	件数
腰痛	132	腰痛	132
肩こり	61	肩こり	61
腰下肢痛	38	腰下肢痛	38
頸肩腕痛	36	頸肩腕痛	36
肩関節痛	35	肩関節痛	35
下肢痛	34	下肢痛	34
逆子	27	逆子	27
膝痛	24	膝痛	24
頸痛	23	頸痛	23
下肢しびれ	21	下肢しびれ	21
上肢痛	18	上肢痛	18

腎痛	16	鼻閉	4
頭痛	14	不眠・睡眠障害	4
肩痛	13	歩行困難	4
肘痛	13	顔面部痛	3
頸肩痛	12	顔面痙攣	3
顔面麻痺	10	頸肩部の	3
腰腎痛	10	動きにくさ	
上肢しびれ	10		
拳児希望	10		
頸肩背痛	9	その他	79
合計			738

### 3.3 インシデント・アクシデント

WHO が 1999 年に「鍼の基礎教育と安全性に関するガイドライン」を発行し、日本でもこれまで以上に安全性に関する関心が高くなった。近年、新たな鍼灸治療における安全性ガイドラインの発行 [3] や鍼灸に関連する有害事象の報告 [4] やインシデントに関する報告 [5-8] が数多く報告されている。

鍼灸部門では、開設当初より有害事象を報告することを義務づけてきた [9]。2000 年以降、さらに安全な鍼灸臨床を行うために、外来終了時のミーティングにおいてインシデント・アクシデント報告を行い、情報を集積している。2011 年度の報告総数は 34 件で、発生総数は 48 件であった。インシデント・アクシデント発生率（インシデント・アクシデント発生総数 / 来診患者総数）は、0.56% であった。内訳は、「鍼の抜き忘れ」（9 件）が最も多く、次いで「一過性の気分不良」（8 件）、「愁訴の増悪」（5 件）であった（表2）。月別報告数は、5 月（6 件）が最も多く、次いで 4、6 月（ともに 5 件）、9 月（4 件）であった。

表2 インシデント・アクシデント分類

分類	件数
鍼の抜き忘れ	9
一過性の気分不良	8
愁訴の悪化	5
内出血	5
刺鍼部の疼痛（刺鍼中）	3
火傷	2
血腫	2
皮膚炎（刺鍼部）	2
患者の放置	1
出血	1
疲労感・倦怠感	1
刺鍼部の疼痛（刺鍼後）	1
その他	8
計	48

最も多かった「鍼の抜き忘れ」について、鍼の抜き忘れが発生した際の抜き忘れた鍼の平均は  $1.3 \pm 1.0$  本であった。内訳は、1 本が 8 件、4 本が 1 件であった。部位別では頭部、頸部が各 2 件、肩上部、胸部、大腿部が各 1 件、不明 1 件であった。

発見場所は、施術ブース内およびベッド上が 5 件で最も多く、患者宅 1 件、診察室 1 件、その他 2 件であった。発見者は、患者 6 件、施術者 1 件、看護師 1 件、その他 1 件であった。施術者と抜鍼者が同一の場合が 5 件、別の場合が 3 件だった（未記入 1 件）。忘れた理由については、「タオルで隠れていた」が 3 件（37%）と最も多かった（図 4）。

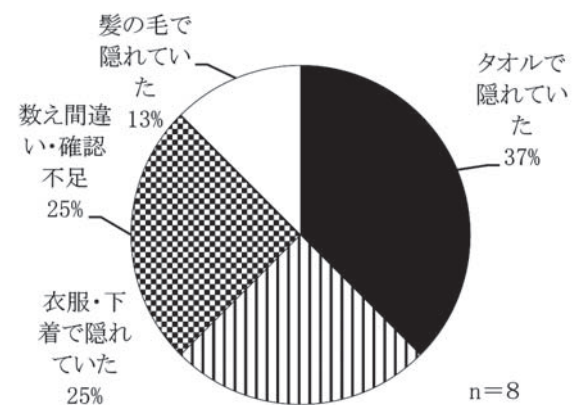


図4 鍼を抜き忘れた理由

インシデント・アクシデント発見時の報告については、「患者から直接」が 28 件と最も多く、次いで「電話」が 3 件、その他 3 件であった。情報源は「患者」が 24 件、「施術者本人」が 4 件、「他のスタッフ」が 4 件、「その他」が 2 件だった。処置および対処方法は、「鍼灸師のみが関与」が 27 件、「所内の医師が関与」が 3 件、「所外の医療機関が関与」が 3 件、「所内の看護師が関与」が 1 件だった。また、インシデント・アクシデントに対する処置で発生した医療費を患者が負担したケースは 3 件あった。アクシデントを未然に防ぐための最も効果的な方法や問題点等を改善するための方策を検討し、臨床にフィードバックすることが大切であると考え。

2011 年度よりリハビリテーション科の開設に伴い、当センターにコメディカルスタッフとして理学療法士が新たに加わった。統合医療を推進していくため、医療従事者が連携することで患者中心の医療を実現できるようチーム医療のあり方を模索しながら地域医療を支えていきたいと考える。

### 参考文献

- [1] 山下 仁, 津嘉山 洋, 他: 鍼灸師の卒後研修. 筑波技術短期大学テクノレポート 5:211-216, 1998.

- [2] 厚生労働省大臣官房統計情報部編：平成 19 年国民生活基礎調査第2巻. 厚生統計協会, 東京, 2009.
- [3] 尾崎明弘, 坂本 歩, 他：鍼灸医療安全ガイドライン. 医歯薬出版株式会社, 東京, 2007.
- [4] 山下 仁, 江川雅人, 他：国内で発生した鍼灸有害事象に関する文献情報の更新（1998 ～ 2002 年）および鍼治療における感染制御に関する議論. 全日本鍼灸学会雑誌 54(1) :55-64, 2004.
- [5] 山下 仁, 津嘉山 洋, 他：視覚障害をもつ鍼灸師が特に注意すべき医療過誤－附属診療所における 6 年間の記録－. 筑波技術短期大学テクノレポート 6:207-209, 1999
- [6] Yamashita H, Tsukayama H: Safety of acupuncture: incident reporting and feedback may reduce risks. BMJ 324:170-171, 2002.
- [7] 江川雅人, 石崎直人：より安全な鍼灸臨床のためのアイデア 鍼の抜き忘れ防止の工夫. 全日本鍼灸学会雑誌 57(1):3-6, 2007.
- [8] 山下仁：より安全な鍼灸臨床のためのアイデア インシデント報告システムの効果. 全日本鍼灸学会雑誌 57(1):7-9, 2007.
- [9] Yamashita H, Tsukayama H, Tanno Y, Nishijo K.: Adverse events related to acupuncture. JAMA 280: 1563-1564, 1998.

## Activities Conducted at an Acupuncture Clinic Held at the Center for Integrative Medicine in 2011

KONDO, H., SAKURABA, H., SAKUMA, T., HAGINOYA, Y., SUZUKI, K., HIRAYAMA, A., KINOSHITA, H.

Center for Integrative Medicine

**Abstract:** This paper presents a statistical report on patients who visited the outpatient department at the Center for Integrated Medicine for acupuncture and moxibustion services during fiscal year 2011 (April 1, 2011 to March 31, 2012). The total number of outpatients was 8,597 (first-time outpatients = 415, return-visit outpatients = 8,182). The sex ratio was 1:1.64 (male:female). The most common age group included individuals between 60 and 69 years of age. Patients' most common complaints included lower-back pain (n = 132), stiff neck (n = 61), and lower-back and leg pain (n = 38). The total number of treatment-related complications reported during this period was 48. The most common incident classifications included forgotten needles (n = 9) and a transient sick feeling (n = 8).

**Keywords:** Acupuncture, Moxibustion, Statistics for outpatients, Integrated medicine